

農業技術 プリズム

ブロッコリー黒すす病 SDHI 剤耐性菌の発生

異なる薬剤 輪番散布を

ラジフルミド、インピルフルキサム、ペンチオピラド、イソフェタミド）を添加した培地上で菌の生育を調査しました。また、各SDHI 剤を散布したブロッ

ブロッコリー黒すす病は、花蕾（からい）に黒色の病斑を生じ、商品価値を著しく低下させるため、経済的な被害が大きい重要病害の一つです。本病に登録のある薬剤には、耐性菌発生リスクが高いとされるSDHI 剤が多く、連用に伴う耐性菌の発生が懸念されています。そこで2023～25年に県内各地から採取した黒すす病菌計75菌株供試し、SDHI 剤に対する感受性を調査しました。

試験は各SDHI 剤（ピ

採取菌株の接種による各薬剤散布ポット苗での発病程度

供試薬剤（商品名）	黒すす病菌A （感受性菌）	黒すす病菌B （耐性菌）
ピラジフルミド水和剤 2000倍 （パレード20フロアブル）	4.0	55.4
インピルフルキサム水和剤 4000倍 （カナメフロアブル）	1.4	50.7
ペンチオピラド水和剤 2000倍 （アフェットフロアブル）	1.2	50.5
イソフェタミド水和剤 1500倍 （ケンジャフロアブル）	2.8	20.8
無散布	52.4	57.8

※表中の数値は発病度であり、発病度の数値が高いほど黒すす病が発病していることを示す

コリー苗に菌を接種し、発病程度についても調査しました。その結果、採取した75菌株中52菌株は薬剤添加培地上でも生育が認められ、薬剤による生育抑制効果が確認できませんでした。また、これらの菌株は薬剤処理したブロッコリー苗においても発病を引き起こし、防除効果の低下が認められました。これらのことから、この52菌株は耐性菌と判定しました。

今後、本耐性菌の発生やまん延を抑制するためには、作用機構の異なる薬剤を組み合わせたローテーション散布を徹底する必要があります。

（長崎県農林技術開発センター畑作営農研究部門中山間営農研究室主任研究員 渡邊 巨）